野鳥だより
—北海道—

第 32 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和53年6月21日

キジバト

キジバトは、北海道では一般に夏鳥であるが道南では、留鳥もいるらしい。

全身灰色がかった褐色をしており、上面と翼には茶色の鱗状の模様がある。下面は淡色でやや赤味がかっている。首の脇には濃青色の縦縞模様がある。尾は灰黒色で羽端には淡灰色の幅広い帯がある。

姿を見たことがない人がいても、デデ・ポーポー・デデ・ポーポーと鳴くあののどかな鳴き声を聞いたことのない人は、いないだろう。5月から8月頃までは良く鳴き、札幌の郊外でも鳴き声を耳にすることは多い。山奥深く棲む鳥とは対照的に各地で良くみられる。周辺に林のある農耕地や草原などを主な棲家とするが、森林も棲家とする。植物の実を好み、地上に降りて餌をさがすことが多い。

さて、このキジバトは昨年の雨あがりの午後、餌でもさがしていたのであろうか、サロベツ原野パンケ沼近くの草叢をチョコチョコ歩いていた。近づいても逃げもせず、頭を振りながら歩く姿は、何とも人なつこかった。

人間は、ヤマバト、マメバト、ツチバト、デデポッポなどと俗名をつけて親しみをおぼえ、キジバトも必らずしも人間を拒んでいるように思えないが、これは人間の身勝手だろうか。何とも人なつこかったキジバトだっただけに気になるところである。

（文・写真　先名征司）

千歳・恵庭地方の鳥類

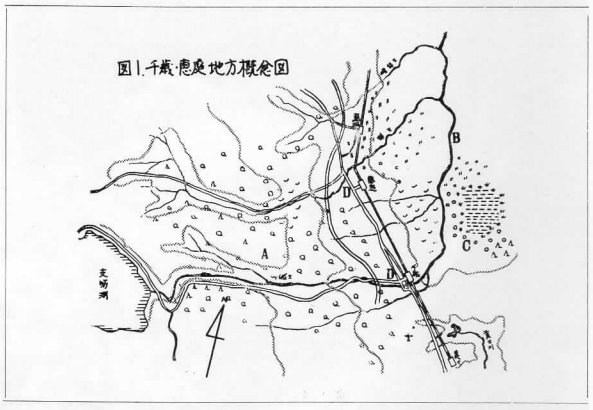
金山哲夫・小山政弘

1. はじめに

筆者らの住む千歳・恵庭地方に生息する鳥類に関する報告はあまりなく、千歳野鳥の会（1972）、小山（1977）によるもののみである。筆者らは、1972年から1977年の約6年間の不定期調査のデータをまとめて、ここに報告しようとする。

2. 調査地の概要

この地方は、石狩低地帯と勇払低地帯とにはさまれた位置にあり、気象上では双方の中間的ないし、やや勇払寄りの特色が認められる。地勢は、支笏火山群による火山噴出物の堆積と、上記両低地帯の各最奥地という地理的条件によって特色づけられている。図1には便宜的に山林（A）、河川（B）、旧長都沼干拓地（C）、市街地およびその周辺（D）と調査地の区分を示した。



3.調査の結果

約6年間に、筆者らの観察ならびに提供を受けた観察情報によって明らかに生息が確認された鳥類は、38科140種であった。そのうちわけは表1に示す通りである。尚、観察データが不統一であったので、各種における生息期間は示さなかった。科、種の配列は日本鳥学会（1974）に従った。稀な種として、ハチクマは飛翔中、尾下面に現われる三条の黒い太帯、ハシボソガラスとの大きさ比較、翼下面の横斑並びに飛翔の動態等により同定された。ツミは1972年9月千歳市内で拾得した死骸をもとに同定された。ヤツガシラは1976年4月千歳市郊外で弱っている1個体が安沢邦夫氏宅で保護された際に観察されたものである。尚、表1で（ ）づけしたクマタカは、関亀三氏撮影の8㎜映画によって同定されたが、上記140種には含めなかった。シロフクロウは、1973年冬期、千歳市街上空を通過する個体を観察した。2回の観察は共に亜成体の個体であった。

表2は、1976年～1977年千歳市内並びに美々川流域で観察されたコウノトリの記録である。

表1　千歳・恵庭地方で生息が確認された鳥類（1972－1977）

W：冬鳥　S：夏鳥　T：旅鳥・通過鳥・迷鳥　R：留鳥
Br：繁殖　Br?：繁殖の可能性がある
A：山林　B：河川　C：旧長都沼干拓地　D：市街地周辺

科名	種名	生息状況	調査区分	科名	種名	生息状況	調査区分
サギ	ヨシゴイ	S	C	ガンカモ	コガモ	R.Br	B.C
	アオサギ	S	B.C		ヒドリガモ	W	B
コウノトリ	コウノトリ	T			オナガガモ	W	B
ガンカモ	オオハクチョウ	W	B.C		ハシビロガモ	W	B
	オシドリ	R.Br	A.B		キンクロハジロ	W	B
	マガモ	R.Br?	B.C		ウミアイサ	W	B.C
	カルガモ	R.Br	B.C		カワアイサ	W	B

科名	種名	生息状況	調査区分
ワシタカ	ハチクマ	S	A
	トビ	R.Br	A.B.C.D
	オジロワシ	W	A.D
	オオワシ	W	A.D
	オオタカ	R	A.C
	ツミ		A
	ハイタカ	R	A
	ケアシノスリ	W	C
	ノスリ	R	A.C.D
	(クマタカ)		A
	ハイイロチュウヒ	W	C
	チュウヒ	S	C
ハヤブサ	ハヤブサ	R	A.D
	チゴハヤブサ	S.Br	A
	コチョウゲンボウ	S	A
	チョウゲンボウ	R	A.C
ライチョウ	エゾライチョウ	R	A
キジ	ウズラ	S.Br	C.牧草地
	コウライキジ	R.Br	A.B.C.D
クイナ	クイナ	S.Br?	B
	ヒクイナ	S.Br	B
チドリ	コチドリ	S.Br	B
	タゲリ	W	C
シギ	キアシシギ	S	B
	イソシギ	S.Br	B
	ホウロクシギ	S	C
	ヤマシギ	S	A
	タシギ	S.Br?	C
	オオジシギ	S.Br	C.D
カモメ	ユリカモメ	T	B(D)
	セグロカモメ	T	B 支笏湖
	アジサシSP	T	B
ハト	キジバト	S.Br	A.B.C.D
	アオバト	S.Br?	A
ホトトギス	ジュウイチ	S.Br?	A
	カッコウ	S.Br	A.B.C.D
	ツツドリ	S.Br?	A
フクロウ	シロフクロウ	W	D
	トラフズク	S.Br	A
	コミミズク	W	C
	コノハズク	S	A
	アオバズク	S	A
	フクロウ	S	A.D
ヨタカ	ヨタカ	S	A
アマツバメ	ハリオアマツバメ	S	A.D
	アマツバメ	S	A.B.C.D
カワセミ	ヤマセミ	R.Br	A.B
	アカショウビン	S.Br	A
	カワセミ	S.Br	A.B
ヤツガシラ	ヤツガシラ	T	
キツツキ	アリスイ	S	A
	ヤマゲラ	R.Br?	A
	クマゲラ	R.Br?	A
	アカゲラ	R.Br	A.D
	オオアカゲラ	R.Br?	A
	コゲラ	R.Br	A.D
ヒバリ	ヒバリ	S.Br	B.C.D
ツバメ	ショウドウツバメ	S	C
	ツバメ	S	D
	イワツバメ	S.Br	A
セキレイ	キセキレイ	S.Br	B
	ハクセキレイ	S.Br	B.C.D
	セグロセキレイ	R.Br	B.C.D
	ビンズイ	T	B.C.D
ヒヨドリ	ヒヨドリ	R.Br	A.B.C.D
モズ	モズ	S.Br	B.C.D
	アカモズ	S.Br	C.D
	オオモズ	T(W)	C
レンジャク	キレンジャク	W	D
カワガラス	カワガラス	R.Br	A.B
ミソサザイ	ミソサザイ	R.Br	A.B
ヒタキ	コマドリ	S	A
	ノゴマ	S	C
	コルリ	S.Br?	A.D
	ルリビタキ	T	A
	ノビタキ	S.Br	C
	マミジロ	T	B
	トラツグミ	S.Br?	A
	アカハラ	S.Br	A
	ツグミ	W	A.B.C.D
	ヤブサメ	S.Br?	A
	ウグイス	S.Br?	A
	エゾセンニュウ	S.Br?	A.B
	コヨシキリ	S.Br	B.C
	オオヨシキリ	S.Br	B.C
	メボソムシクイ	S	A
	エゾムシクイ	S	A
	センダイムシクイ	S.Br?	A
	キクイタダキ	R.Br?	A
	キビタキ	S.Br	A
	オオルリ	S.Br	A
	サメビタキ	T	A.C
	コサメビタキ	T	A.C.D
エナガ	エナガ	R.Br	A
シジュウカラ	ハシブトガラ	R.Br?	A
	コガラ	R.Br	A.D

科名	種名	生息状況	調査区分
	ヒガラ	R.Br?	A.D
	ヤマガラ	R.Br	A.D
	シジュウカラ	R.Br	A.D
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	R.Br	A.D
キバシリ	キバシリ	R	A
メジロ	メジロ	R.Br?	A
ホオジロ	ホオジロ	S.Br	C.D
	ホオアカ	S.Br	C.D
	ミヤマホオジロ	W(T)	A.D
	シマアオジ	S.Br	C
	アオジ	S.Br	A.B.C.D
	クロジ	S	A
	オオジュリン	S.Br	C
アトリ	アトリ	W	A.D
	カワラヒワ	R.Br	A.B.C.D
アトリ	マヒワ	T	A
	ハギマシコ	W	A.D
	イスカ	T	D
	ベニマシコ	R.Br?	A
	ウソ	R	A
	イカル	S	A.D
	シメ	S.Br?	A.D
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ	S.Br	A
	スズメ	R.Br	D
ムクドリ	コムクドリ	S.Br	A.B.C.D
	ムクドリ	S(R).Br	A.B.C.D
カラス	カケス	R.Br?	A.B.C.D
	ハシボソガラス	R.Br	A.B.C.D
	ハシブトガラス	R.Br	A.B.C.D
	ワタリガラス	T	A

4. 考　察

千歳・恵庭地方は、旧オサツ沼干拓地に代表される湿草原・乾草原、千歳川・漁川流域の渓流、さらにそれらの流域ぞいに広がる森林、および下流の緩流域と、鳥類の生息環境としては多岐に広がっており、生息が確認された種類を見てもそれを裏づけている。

春秋の煙霧が生じやすい頃や、勇払海岸が荒れている日には、千歳・漁川にはカモメ類が下流から飛来することがある。旧オサツ沼が干拓開発される以前には、カモメ類が頻繁に飛来したという古老の話もあるし、著名な動物採集家故折居彪二郎氏が残した調査資料（未発表）によっても、この旧オサツ沼が今日のウトナイ沼（苫小牧）を上まわるガン・カモ類生息地帯であったことがわかる。現在この旧オサツ沼干拓地には、耕作不能地がまだ多く、カモ類、タカ類やシマアオジ、ノビタキ、オオジュリン等の草原性鳥類が多く観察される。また、小山（1974）の報告のように、冬期には今だにオオハクチョウの休息地にもなっており、コウノトリも観察されていることからも、広大な鳥類の生息環境を失なったという意味で、この旧オサツ沼の消滅は惜しまれる。

小笠原ら（1977）は、1976年～1977年に東北地方各地で観察されたコウノトリに関して報告しているが、筆者らの聴取データ等を合わせ考えると、千歳付近には1976年3月～9月の間滞在し、その前後に札幌市篠路町茨戸、苫小牧市ウトナイ沼、石狩郡新篠津村、美唄市宮島沼そして函館市石倉町へと移動したものとも考えられる。この期間に美唄と函館で観察された個体は同一の可能性があるとする小笠原らの推測は、筆者らの得たデータによっても否定されるべき根拠は見当らない。

尚、1977年1月～2月に、千歳、苫小牧の美々川流域一帯で2個体のペアが観察されているが、1976年に観察された個体との関連は不明である。

オジロワシ、オオワシは、千歳・恵庭地方では以前から冬期間観察されてきたが、筆者らの経年観察によれば、12月初旬支笏湖で初認されてから徐々に千歳川流域に沿って市街地に接近し、美々の市営牧野、畜肉処理場

表2　千歳地方で観察されたコウノトリ（1976～1977）

観察年月日	観察場所	個体数（目撃回数）	観察者
1976.3.23	千歳旧祝梅川	1　(1)	早坂栄作
4.7	〃	1　(2)	内田　薫
4.8	〃	1　(2)	内田　薫・樋口武亜・大谷敏三
4.8	〃	1　(1)	内田　薫・金子一章・高橋歳雄
4.9	〃	1　(1)	内田　薫・金山哲夫
4.11	〃	1　(1)	清水　修
4.18	千歳中央長都(旧オサツ沼)	1　(1)	田村和義・田村智之
4.22	千歳旧祝梅川	1　(1)	沢田幸男
5.16	千歳美々市営牧野	1　(1)	福本与一・小林寿範
6.上旬	千歳旧祝梅川	1　(1)	上田謙一・上田早苗
6.下旬	〃	1　(1)	上田謙一・上田早苗
7.下旬	千歳中央長都(旧オサツ沼)	1　(1)	佐々木正雄
8.上旬	〃	1　(1)	佐々木正雄
8.上旬	美々川植苗橋付近	1　(1)	田村和義
8.26	千歳中央長都北沼通り	1　(1)	榊原武雄・長見義三・横井　恒
9.5	千歳中央長都(旧オサツ沼)	1　(1)	佃　重一・佃　フミ子・佃　伯彦
9.上旬	千歳泉郷ケヌフチ川	1　(1)	上田謙一・鹿　内
9.22	千歳中央長都(旧オサツ沼)	1　(1)	田村和義
(4月～9月)	千歳長都(旧オサツ沼)	1　(1)	平井英敏
1977.1.3	千歳祝梅	2　(1)	丹治昭夫
1.上旬	〃	2　(1)	岩崎
2.18	千歳駒里	2　(1)	新保義夫
2.中旬	美々川パンケナイ川付近	2　(1)	亀山義昭
2.26	千歳市街国道36号	2　(1)	亀山義昭
3.18	千歳祝梅(旧祝梅川)	1　(1)	内田　薫
4.上旬	〃	1　(1)	内田　薫

迄移動する動態がうかがえる。美々市営牧野を観察基点として、これらウミワシ類の蒔位置を推定すると、苫小牧北大演習林方面及び千歳川上流方面への飛去が観察される。12月～3月にウトナイ沼に集まるオジロワシ、オオワシと、千歳地方一帯で観察されるものとの関係を考えると、同一個体らしいとする根拠となる観察はこれ迄になされていない。データ不足のまま推測すれば、美々市営牧野にはウトナイ沼に行動圏を持つ個体群と千歳川流域に行動圏を持つ個体群とがそれぞれ飛来するようにも考えられる。

1977年1月～2月には、恵庭市街地から1㎞漁川上流で最高3個体のオジロワシが観察された。ここには市営ゴミ捨て場があり数百のハシボソガラス、ハシブトガラスが常時集結するが、オジロワシは、それらに混って観察される。2月下旬には、オジロワシ亜成体が市街地上空を飛翔するようになり、3月初旬には、恵庭と千歳の境界地帯の国道上空でも観察された。季節的小移動の例である。

以上、簡単に考察したが、渡り鳥の寄留地として、もしも旧オサツ沼が保存されていたならば、ウトナイ沼と相まって、渡り鳥保護の上でどれ程高く評価されるかを考えると、開発至上主義を支える自然環境換金思想は大きな疑問の対象となる。現在、千歳・恵庭地方では、河川護岸工事による流域単調化が進行しており、オオヨシキリ、エゾセンニュウ等が急速に市街地から遠ざかっている。重ね重ね残念なことである。

引用文献

(1) 千歳野鳥の会（1972）：千歳市に生息する野鳥（第一報）

(2) 小山政弘（1977）：恵庭の鳥類（自刊）

(3) 日本鳥学会（1974）：日本鳥類目録、学習研究社刊

(4) 小山政弘（1974）：畑地のオオハクチョウ、野鳥だより №18．p8

(5) 小笠原暠・泉　祐一（1977）：東北地方以北に渡来したコウノトリ、山階鳥類研究所研究報告Vol．9 №1（№48）、p121～127

旭川のワシタカ類（下）

山田良造

ハイタカ♀

5．クマタカ（ワシタカ科）

昭和51年1月26日、嵐山上空でクマタカが2羽のハシブトガラスにまとわりつかれて攻撃されていた。しかしこのクマタカは嵐山が気に入っていて、3月中旬まで確認された。大型のタカがカラスの攻撃を受け、ただ逃げているのを見て、哀れにさえ思われた。嵐山の見晴らしのよい古木に止まっているのをよく見かけた。後になってわかったことだが、エゾリスの毛が雪の上に散乱している状況から、嵐山に個体数の多いエゾリスを餌としていたと思われる。

6．ハイイロチュウヒ（ワシタカ科）

昭和47年秋もゆくころ、市内春光台のカシワの老木に灰白色の大型のタカ、ハイイロチュウヒが止まっているのを、北村五郎氏が記録した。渡りの途中、餌を求めて立ち寄ったものと思うが、旭川ではこの一例だけの珍鳥である。

7．オジロワシ（ワシタカ科）

大型のワシ。昭和49年からの記録では、12月2日～翌4月7日ころまで、市内嵐山一伊納周辺の石狩川沿いで見られる。このころ石狩川には冬鳥のホオジロガモ、マガモ、カワアイサ等が渡ってくる。オジロワシは石狩川沿いの崖に生えている見晴らしのよい樹上でじーっと、この水鳥を狙っていた。時には石狩川の岩場に降り、餌を狙っていた。警戒心が強く、人を寄せつけない。近年は成鳥1羽と亜成鳥2羽の計3羽が記録されている。旭川のように内陸部で沼等のない場所に、しかも街の周辺でオジロワシを見られることを大切にしたい。

8．トビ（ワシタカ科）

市内で普通に見られる。嵐山、旭山、神楽岡公園、時には市街地の樹木で営巣している。餌場はゴミ捨場、河川等で、繁殖期間が過ぎると、何十羽と群れをなしている姿が、神楽岡公園や嵐山南側斜面のねぐらで見られる。人間と同居しながらも、警戒心は強い。昭和49年8月、鷹栖町の山林で白化のトビが生まれて話題になったが、仲間にいじめられることが多く、昨年8月17日、江丹別のゴミ捨場でへい死した。

9. ノスリ（ワシタカ科）

昭和49年8月10日、市内東旭川町米飯山道で車の前を飛び立ったノスリを見る。時期から見て繁殖の可能性があると思うが、旭川では繁殖記録なし。昭和50年12月1日には、鷹栖町で水田のくいに止まっているノスリを、田嶋邦男氏が写真撮影した。旭川でノスリの記録は少ない。

10. ハイタカ（ワシタカ科）

秋から翌年の春にかけて、市内神楽の見本林、嵐山等でよく見ることが多かったが、昨年6月5日、市内神居地区の山林で、北海道新聞・後山カメラマンによって営巣が確認された。6月10日からは私も通って観察したがストローブマツの14mぐらいの高さに、カラマツの枝で作ったハシボソガラスの古巣を利用して、営巣していた。後山氏の説明によると、白い卵が3個あるとのこと。卵を抱く♀の尾が下からでもよく見える。♂が警戒啼きを発しながら、近くの枝に止まっていた。周囲はカラマツ、ストローブマツが繁り、セミの声が圧している。6月18日、後山氏からヒナが誕生したことを知らされる。7月4日、まだ白い産毛に包まれたヒナ1羽、巣上に見える。その後の成長は早く、日一日と茶色に衣替えし、巣上で羽ばたきを繰り返す。親は人が近寄るとキイ、キイと激しく警戒啼きして現れ、付近の枝に止まって見張りをする。人のいる間は餌を与えようとしない。私はこの状況を見て、いつも早々と退散した。7月13日ハイタカのヒナは巣立ちし、10m先のカラマツに飛び移った。まだ残る産毛をくちばしで引き抜いている。腹部の横縞がかなりはっきりしてきた。巣立ち後も10日ぐらいは、巣の周辺から離れようとしなかった。♂♀の一方はこれに付き添うように、付近の枝で見張っていた。

ハイタカのヒナ

11. ツミ（ワシタカ科）

小型のタカ。旭川での記録は少なく、ハイタカと似ている。昭和49年8月28日、鷹栖町10線2号で、小鳥を狙っているツミを記録した。まだ幼鳥のようであり、繁殖している可能性がある。

昭和50年6月15日、美瑛町五陵でオオルリの営巣を撮影中に、巣から10m先の林内にツミ♂が止まっているのに気づいた。小型ながら鋭い眼をしている。オオルリを狙っていたのだろう。人に気づき、2分後に飛び去った。

12. チョウセンオオタカ（ワシタカ科）

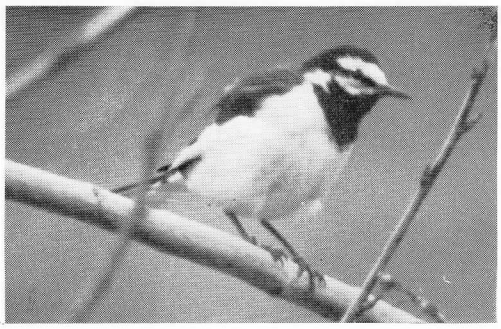
昭和51年6月、鷹栖町の山林でチョウセンオオタカが営巣しているのを、内海千樫氏が発見した。7月17日、内海氏に同伴して観察した。カラマツの樹上14mぐらいの高さに、トビの古巣を利用したチョウセンオオタカの巣があった。巣はカラマツの青枝を敷いた大型のもので巣には腹部に縦縞のある、巣立ち近いと思われるヒナ2羽がいた。ヒナは3羽生まれ、1羽はすでに巣立ちしたと聞く。付近でヒナを見張っていた親がクワッ、クワッと激しく鳴き、飛び去る。警戒心が強く、なかなか戻って来ないと聞き、早々に退散した。このヒナは7月21日無事に巣立ちした。

内海氏は昨年も4月12日、別の林でチョウセンオオタカを観察し、7月中旬、3羽のヒナが巣立ちしたという。

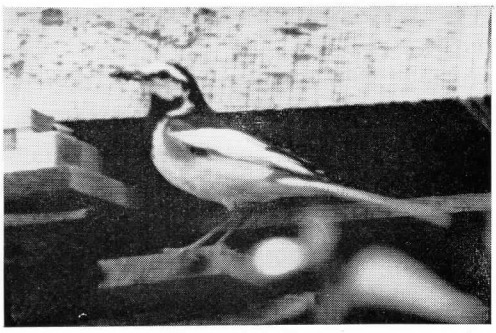
セキレイのこと

川辺百樹

「現在、日本の鳥については、少し身を入れて観察した人なら誰でも知っているようなことで、どの本にもどの雑誌にも書かれたことのないことが多数あります[1]」。今日はそんな話題を一つ。写真1を見てください。なんとなくかわった顔つきをしているかなと感じたらあなたはハクセキレイに対して鋭い観察眼を持った方にちがいありません。写真2と見くらべてください。じつは、下嘴のつけ根が白か黒かというただそれだけのことなのですが、それによって別亜種に分けられているのですから軽視できないのです。のどの黒い写真1が Motacilla al



1



2

ba ocularis タイワンハクセキレイ[2]、そしてのどの白い写真2が Motacilla alba lugens ハクセキレイ[3]なのです。私が写真1のハクセキレイを道内に普通に分布しているであろう M. a. lugens ではなく M. a. ocularis であると気づいたのには深いわけがあるのです。

写真3は写真1の M. a. ocularis が給餌に巣へ向かっているところです。写真4はおかしなことに同じ巣にセグロセキレイ Motacilla grandis が向かっているところです。つまり、このハクセキレイとセグロセキレイは番いというわけです。一昨年1976年6月に上士幌でこの場面を目撃した時には本当に驚きました。何度も自分の眼を疑ったものです。ところが後日文献[4]を調べてみるとセキレイ属に限っても種間あるいは亜種間の交雑は意外と多いのです。

- Motacilla alba yarrellii × Motacilla cinerea
- Motacilla cinerea × Motacilla flava flava
- Motacilla alba alba × Motacilla alba yarrellii
- Motacilla alba leucopsis × Motacilla alba lugens
- Motacilla flava flava × Motacilla flava feldegv

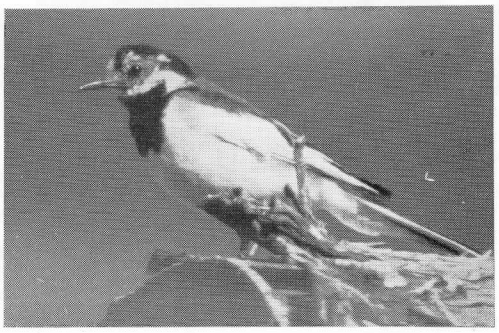
私が調べただけでもこれだけあるのです。したがってハクセキレイとセグロセキレイが番いになったところでそれほど驚くことではないのかもしれません。セグロセキレイは日本の特産種、ハクセキレイは主に北海道で繁殖。つまり現在分布が重なるのは北海道ということです。注意深く観察すればまだこのような例は見つかると思われます。

さて写真5を見てください。こんどは多くの方がおかしな顔をしたハクセキレイだと気づかれたことでしょう。この原因が皮膚病など病的なものなのかまた遺伝的なものなのかさらにはハクセキレイとセグロセキレイの交雑の結果なのか、今のところ謎につつまれたままです。昨年1977年の夏に音更川で行った調査では327個体中このような顔をしたものが2個体出現しました。なんだハクセキレイかなどといわずよく注意して見てはいかがでしょうか。

以上私のセキレイ観察の一端を紹介しましたが、最後にお願いが一つ。写真1や5のようなハクセキレイを見たり、あるいは繁殖期にセグロセキレイとハクセキレイ

3

4



5

を一緒に見たなどの情報をお持ちの方はぜひ御一報ください。

(1) 浦本昌紀　アニマ46号　98ページ

(2)、(3) 両亜種ともユーラシア大陸の東部に分布。ハクセキレイは北日本・千島・カムチャッカで繁殖しタイワンハクセキレイはそれよりも北の東シベリアで繁殖している。

(4) A. P. Gray 1958 Bird Hybrids パノフ E. N. 1973 南沿海地方の鳥類

◇ 連 絡 先 ◇

〒 080—15　河東郡上士幌町糠平

日高山脈のハギマシコとギンザンマシコ

戸田敦文・吉田真二

ハギマシコとギンザンマシコは、繁殖期に北海道の高山帯で観察されているが、日本鳥類目録第5版によると、これまでの記録は大雪山と利尻岳だけである。

私たちは、帯広畜産大学自然探査会の日高山脈の自然調査の一環として、日高幌尻岳七ツ沼付近と日高山脈の北端に位置する芽室岳で鳥類の調査を行った。この際ハギマシコとギンザンマシコを観察することができた。

◇ハギマシコ

1976年6月13日、芽室岳山頂(1753 7m)の岩上で1羽

◇ギンザンマシコ

(1)1975年7月21日、日高幌尻岳七ツ沼(1600m)付近のハイマツ上で雄1羽、(2)1976年7月20日に七ツ沼付近で飛翔中の雄1羽、(3)1976年7月24日、七ツ沼のふち地上で採餌中の雌雄各1羽

観察記録は以上のとおりであるが、このうちギンザンマシコはつがいでみられたところから、ここで繁殖する可能性がある。なお日高山脈における繁殖期のハギマシコとギンザンマシコの記録としては、私たちの知るかぎりでは、上記のものが最初である。

♀　♂

ギンザンマシコの雌雄
〈日高・幌尻岳七ツ沼カール〉

◇◇◇ オオジュリンのアルビノについて ◇◇◇

三浦二郎

野付半島は、センダイハギの盛りが過ぎ、ノハナショウブが草原を紫に染め変える7月の下旬でした。山階鳥類研究所標識研究室の黒沢収氏や根室市東梅の鳥類研究家高田勝氏等が標識調査の適地と考えていたポイント周辺のオオジュリンは、育すう末期で、中にはテリトリーの崩壊解消が間もないカップルもいたようです。黒沢氏等は一週間でオオジュリン26のほか、シマアオジ、シマセンニュウ、ノビタキ、ヒバリ、カワラヒワ等、80羽余りのバンディング（足環付け）をされ、予想以上の好成績に喜んでおられました。

私も夏休みに入ってからは1日おき位に野付半島通いをしておりました。そして、その休みの残りも少なくな

ってきた8月15日、半島先端部の干潟にいるダイゼンやキアシシギのカウントを終って車をUターンさせて間もなく（野付半島総合調査実施のため特別に車での通行証を発行して頂いております）、センダイハギとハマナスの群落から飛び立ったオオジュリンの家族群の中に、やけに白っぽい個体がいるのを発見し急停車しました。双眼鏡でセンダイハギの枝先に止まっている個体を観察したところまぎれもなくオオジュリンの全身アルビノだったのです。135㎜のついたカメラをかまえましたが、飛び立ってしまいましたので、やむを得ず車から出てその姿を追いました。しかしやはり撮影は不成功に終りました。その日はそれ以上追い廻すのはよして、帰宅してから黒沢氏に連絡しました。

黒沢氏は、浜頓別のステーションに移動する予定をまげて、再度、野付半島にかけつけてくださり、2日目の午前10時頃、このアルビノ1個体の捕獲に成功されたのです。フィールドで見るとほとんど白に見えたのですが手にとってよく見ると各羽毛の外縁はうすい茶色の色がつき、それも当然のことながら背面は濃く、特に耳羽の淡黒褐色は特徴的でした。勿論、下面はほとんど白ですから、全身白化個体といってよいと思います。写真の人物は黒沢氏で、黒沢氏のカメラに収める時は私が手にするという具合に交替で撮った写真の中の1枚です。

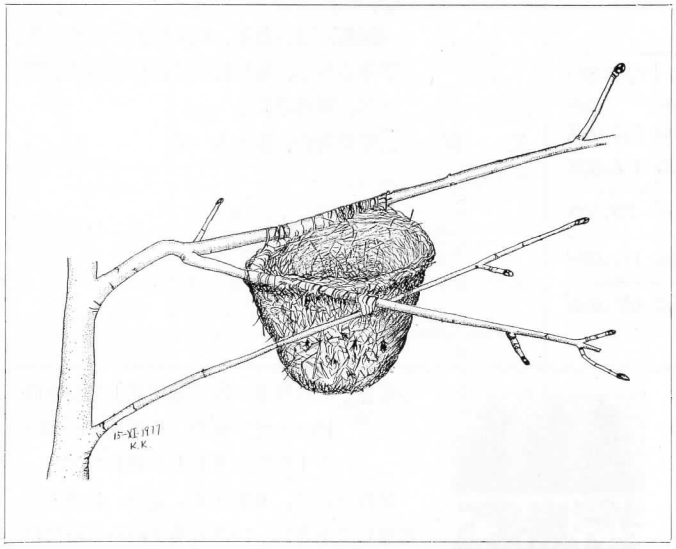
オオジュリンのアルビノ（幼鳥）

その後1週間程して半島先端部に行った時は、ついにその姿に再び会うことはできませんでしたし、それから後も遂にめぐり会えませんでした。これは白化個体だから害敵の目につきやすく、その付近を徘徊するチゴハヤブサ等に捕われたのではなく、親兄弟と一緒に既に海を渡って移動したのだろうと考えたいのです。来春生まれ故郷の野付半島で、よき伴侶と共にテリトリーを構えてくれることを念じております。

美唄でメジロの巣を確認

中田圭亮・東浦康友
菊沢喜八郎

初雪が解けた間をみはからって試験場の裏山を歩いたとき、すっかり葉を落したイタヤカエデの枝に小さい椀形の小鳥の巣をみつけた（図参照）。見つかるときは面白いもので、翌日またその近くでMさんがミズナラの枝についた巣をみつけ届けられた。



図鑑でしらべてみると、メジロの巣らしい。山階鳥研究所に送ったところ、笹川昭雄さんから、叉状の小枝にクモの糸で吊り下げられた椀形の巣はメジロに間違いないとの御教示を得た。巣は禾本科植物の茎、蘚類、化学繊維（ポリエチレンのひも）などを材料にして、それらをクモの糸でつづり合わせたものである。

美唄の鳥類相について報告した藤巻（1973：鳥、22巻93・94号）は光珠内においてメジロの巣立ち幼鳥を観察し、繁殖は確実であろうとした。今回、巣を発見したことは繁殖のあることを一層確実にしたものと考えられる。

巣の同定、確認をしていただいた山階鳥類研究所、笹川氏にお礼申し上げる。

データ

発見した年月日	環境	巣の大きさ(㎝)	巣の状況	地上からの高さ(m)
1977年11月15日	丘陵地の広葉樹林	—	林道沿い イタヤカエデ枝上	2.0
〃 11月16日	〃	外径 7.0 高さ 4.5	林内 ミヅナラ枝上	2.3

昭和53年度総会経過報告

と　き　昭和53年4月15日（土）午後2時
ところ　北海道婦人文化会館

総会では井上副会長を議長に選出した後、次の事項について審議がなされ、原案通り承認成立いたしました。

(1)　昭和52年度事業報告、決算報告及び監査報告について（報告書別記1）

(2)　昭和53年度事業計画及び予算案について（計画書及び予算案別記2）

(3)　その他、会務運営について
会務運営については、会発足以来、道庁への依存度が高かった会務のあり方を改め、自主運営を目ざすこととなりました。また、これに最も適した事務局のあり方についても検討を進めることとなりました。

(4)　役員選出（役員氏名は別記3の名簿のとおり）

〔別記1〕昭和52年度事業・決算・監査報告（要旨）

〈事業〉1.　探鳥会の開催（52年5月から53年3月まで11回実施）。2.　野鳥だよりの発行（28号から31号まで4回発行）。3.　会議等の開催（52年度総会を含めて6回開催）。4.　その他の事業（干潟鳥類全国一斉調査を2回実施、新年懇談会開催、14種の道内野鳥の分布調査の実施等）

〈決算〉　収入 601,925円　支出 461,832円
差引残額 140,093円

収入の部

区分	決算額	予算額
	円	円
会　費	482,400	532,000
寄付金	15,500	0
雑収入	1,937	3,000
繰越金	102,088	102,088
計	601,925	637,088

支出の部

区分	決算額	予算額
	円	円
印刷費	211,900	210,000
通信費	117,020	166,000
会議費	57,307	80,000
その他	75,605	181,088
計	461,832	637,088

〈監査〉　適当なものと認められました。

〔別記2〕昭和53年度事業・予算案（要旨）

〈事業〉1.　探鳥会の開催（53年4月から54年3月まで12回開催予定））。2.　野鳥だよりの発行（32号～35号まで4回発行予定）。3.　その他の事業（干潟鳥類全国一斉調査2回予定、新年懇談会、野鳥分布調査等を予定）。

〈予算〉

収入の部

区分	予　算　額
会　費	444,000円 個人1,000円×423人 団体3,000円×7件
寄付金	10,000
雑収入	1,907
繰越金	140,093
計	596,000

支出の部

区分	予算額	摘　要
印刷費	円 240,000	会誌 170,000 会員台帳等
通信費	140,000	送料 125,000 他通信費等
会議費	74,000	総会、役員会、編集等
その他	142,000	消耗品等
計	596,000	—

〔別記3〕昭和53年度役員名簿

会　　長　　犬飼哲夫
副 会 長　　井上元則、中野正彦、斎藤春雄、新妻　博、土屋文男
代表幹事　　柳沢信雄
幹　　事　　〈総務・会計〉　新宮康生、野村梧郎、岡田幹夫、小野寺敬子、四十万谷吉郎、金田寿夫、川村　順、中田克道、藤本紀一、
〈広報〉谷口一芳、村野紀雄、小川　厳、小堀煌治、三木　昇、萩　千賀、飯山五玖子、白沢昌彦
〈探鳥〉羽田恭子、梅木賢俊、松岡　茂、平井さち子、亀尾紋十郎、小沢広記、野口正男、柳沢千代子
監　　事　　苣野寿衛吉、佐々木　勇

9月までの予定をお知らせします。多数の方々の参加をお願いします。会員以外の方も歓迎しますので、お誘い合わせの上、ご参加下さい。

〈石狩川畔（札幌市福移）探鳥会〉

◆とき　昭和53年7月2日（日）
◇集合　札幌市営バス札苗線「福移入口」停留所に午前8時までに集合

〈鵡　川　海　岸〉

◆とき　昭和53年8月27日・9月17日
◇集合　国鉄日高本線「鵡川駅」午前9時10分までに集合。札幌発7時40分の「急行えりも」が便利です。

探鳥会には、観察用具、雨具、昼食等を用意して下さい。いずれも2時～3時には終了します。雨天のときは中止します。

〈連絡先〉　札幌市中央区北4西5（林業会館）
北海道国土緑化推進委員会内
北海道野鳥愛護会　電話 261—9022

このほか、次のように会員が野鳥散歩を行いますのでご一緒にどうぞ。

〈野幌森林公園〉

と　き　7月9日、9月24日

集　合　午前8時、国鉄バス「北海道女子短大前」停留所

〈鵡川海岸〉

と　き　8月20日

集　合　午前9時10分、国鉄日高本線「鵡川駅」

連絡先　柳沢信雄　電話（851）6364

羽田恭子　電話（611）0063

※　日時を変更することがありますので、参加される方は、前日までに各連絡先までご連絡願います。

※　雨天のときは中止します。

※　昼食、雨具、筆記用具などをお待ち下さい。

ウトナイ湖探鳥会

羽田恭子

この季節、例年なら雪のない湖畔が、今冬の豪雪で深い処は、まだ腰までぬかる積雪量に、驚ろいたり呆れたり。観光ホテル前からユースへ向う道筋では、一足毎にぬかる足元に悪戦苦闘。

湖も遙か彼方の湖面はあいていますが、大半は氷が張りつめ、遠い遠い水鳥を眺めました。それでも、滑る足元を気にする様に、オレンジ色の脚を交互に出して氷の上を歩くヒシクイの姿や、美しさの増したカモ類、北帰を前に鳴き交すハクチョウの優雅な姿を堪能しました。

〔とき〕　53年3月26日　10:00～13:00　快晴

〔担当幹事〕　梅木賢俊・羽田恭子

〔記録された鳥〕　アオサギ　オジロワシ　オオハクチョウ　ハクセキレイ　ヒバリ　コゲラ　ツグミ　トビ　オナガガモ　マガモ　キンクロハジロ　ホシハジロ　カワアイサ　マガン　ヒシクイ　ヨシガモ　ミミカイツブリ　キジバト　ツルシギ　カシラダカ　オオワシ　コハクチョウ　オオセグロカモメ　シロカモメ　ミコアイサ　カルガモ　チュウヒ　ヒドリガモ　シジュウカラ　オバシギ（合計30種）

〔参加者〕村田信義・謙子　鷲田善幸　柳沢信雄・千代子　野々村菊　米山露子　飯山五玖子　長井博　小山政弘　宮崎政寛　山岸貢　野村梧郎　萩千賀　宮崎武・静江　梅木賢俊　羽田恭子

野幌探鳥会

早瀬広司

4月23日午前8時女子短大前に15名集合。快晴でうすら寒し。羽田さんに円山で撮影されたフクロウの写真をみせていただく。中央口までの草原には沢山人家が新築され、スズメ、カラス、ムクドリ、ハクセキレイ等で野鳥のみられる数が減少した。原始林の近くでホオアカ、キジバトの群れがみられ、ヒバリの囀りもきかれるようになった。原始林の道路には、まだ30～40cmの残雪があり、豪雪により所々に大きな幹が引きちぎられて横たわり、通れない個所があった。ズックの運動靴で参加した2名の小、中学生は靴下が雪路のためにびしょぬれになったが、大沢園地まで頑張った。入口付近の笹と融雪の地面の間にいたアオジをゆっくり観察することができた。木の下の融雪の地面の所々に福寿草、フキノトウ、道路横の大きな溜り水にはエゾサンショウウオの卵塊、春のおとずれがみられた。豪雪で折れた木の枝、道路わきの木の皮を野兎が喰いちぎり、銅貨状の糞を残していた。ゴジュウカラ、ニュウナイスズメも近くで見られた。エゾユズリハコースの終り近くの道路の側に大きなタモの真新しい切口、直径50～100cm位の楕円形、村野さんの鑑定では樹令150年、高さ30m、腐ったところがあるにしても、切ってしまうのは誠に口惜しい気がした。融雪で増水した池には水鳥を見ることができなかった。わずかにアオサギが空高く1羽飛んで行くのがみられた。残雪でまだベニヒワの群れが残っているかと期待したが、無駄であった。

次第に気温があがり、大沢園地では日なたのベンチで昼食。

帰りの桂コースではほとんど野鳥の声がきかれなかった。道路わきの大きな桂の根本に四角の大きな穴、縦に3個、またその右側に1m以上縦に深くほりあけられて、たくさんの木のくずが地面にちらかっていた。クマゲラが虫を食うためにあけたものであろうか、雪の道路上にたくさんの羽毛がちらばり、その中に大きな黒い糞があった。猛禽類がキジバトをおそったのであろうか、

例年に比べて夏鳥のおとずれがちょっとおそいのは全国的に春がおそい影響であろう。

〔担当幹事〕　柳沢信雄・羽田恭子

〔記録された鳥〕　スズメ　ハクセキレイ　カラス　ヒバリ　カワラヒワ　ムクドリ　ホオアカ　ツグミ　トビ　キジバト　カケス　モズ　アカゲラ　ゴジュウカラ　ヤマガラ　アオジ　ヒヨドリ　ニュウナイスズメ　エナガ　シジュウカラ　キクイタダキ　ウソ　エゾライチョウ　アオサギ　ヒガラ　ハシブトガラ　トラツグミ　ルリビタキ　オオアカゲラ　ヤマゲラ　コゲラ（合計31種）

〔参加者〕　羽田恭子　早瀬広司・富　三木昇　村野紀雄　野々村菊　大野哲夫・千津・菜穂　清野久子　谷口一芳・登志　柳沢千代子・信雄　米山露子

鳥民便り

◆チエックリストはもう試しましたか

「野鳥だより」31号と共に皆様のお手元にお届けしたチエックリストは、実際に使ってみましたか。この種のチエックリストが本格的に用いられるのは、恐らく日本で初めてと思います。それだけに是非成功させたいものと、担当幹事一同おお張り切りです。すでに一人で5枚、10枚とチエックした会員も出ています。事務局に沢山余部を用意してますので、枚数を明記の上申し込めば、折り返しお送りします。

集計体制については、まだ検討を要する事柄が残されているため、本年度はとりあえず事務局宛に送ってもらうことにしました。少なくとも3年間程度は継続させていく事業を目指していますので、できれば各ブロックごとに集計と調査区画の選定をお願いし、それらをもとに全道的な分布図を事務局で作成するようなシステムが出来ればと考えています。一部の会員には地域責任者になっていただくべく改めてお願いすることにしてます。その際はどうぞよろしく。

また集計体制をはじめ、チエックリストの体裁、内容等でお気づきの点がございましたら、事務局宛ご一報いただければ幸いです。締切りは、シギ・チドリ類が記録される地域は11月末日、それ以外の地域は9月末日と致します。全道各地のチエックリストが続々送られてくるのを今から心待ちにしています。

◆ガイドブック紹介

この春、道内で次の2冊があいついで刊行されました。いずれも北海道の野鳥を棲息環境別にカラーの生態写真を用いながら、初心者を対象にわかりやすく解説しています。もちろん、ベテランにも参考になります。装丁がしっかりしていて野外での携帯に便利です。また、いずれの本にも本会々員が写真提供や執筆に活躍しています。

・北海道の野鳥（北海道新聞社編集・発行 1,800円）
　草原、森林、里、山、水辺、湖沼、海にわけて223種を紹介。説明が随筆風で楽しい。

・北海道の鳥（竹田津　実、小川　厳著、北大図書刊行会発行　1,300円）
　森林、草原、耕地、水辺、海岸、海にわけ140種（写真掲載分）を紹介。種類の識別が整理されているほか、道内の野鳥マップ、野鳥の会のことなども簡単に紹介している。

◆夏鳥の初認記録をお寄せ下さい　多数の会員の方々のお便りをお待ちしております。送り先は事務局あてにお願いいたします。

◆子供博覧会について　本年7月下旬から8月上旬に開かれますが、野鳥部門で本会も協力することが役員会で決まりましたのでご注目ください。

◆入会歓迎　会員の輪を拡げましょう。同封の入会案内をご活用ください。

◆おわび　31号5ページの写真の説明「ハイタカのヒナ」は「オオタカの巣とヒナ」の誤りでした。訂正しておわびいたします。

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

受理して久しい原稿を全部納めることができ、読みごたえのある記事ばかりとはなりましたが、そのために探鳥会報告などのスペースが小さくなってしまいました。次号からは探鳥地紹介などにも力をいれることになっておりますので、各地の皆さん、是非御寄稿下さい。本誌のレイアウトは広報幹事が交代でやっていますが、今号は白沢幹事がこれにあたりました。また野鳥分布調査の窓口を小川幹事としています。どうぞよろしく。（村野）

★　初めて会誌の編集を担当させていただきましたが、寄稿していただいた原稿をいかに読みやすく、いかに興味をもってもらえるかについて、苦心いたしました。また、これまでとは少し変ったものをと考え考え行いましたが、結局はこれまで発行された「野鳥だより」とにらめっこしながら、ただページを埋めるのに精一杯でした。出来ばえはご覧のとおりです。（白沢）

〔北海道野鳥愛護会事務局〕〒060 札幌市中央区北4西5（林業会館）北海道国土緑化推進委員会内 電話(261)9022